

西尾邦夫著

# 国語教育と話しことばの創造

——劇の学習——

野地潤家

## 一

西尾邦夫氏の新著「国語教育と話しことばの創造」は、「劇の学習」という副題を有している。副題ではあるが、話しことばの創造を志向する国語教育において、劇の学習がどういう位置に立ち、いかなる役割を持ち、どのように展開されるべきかについて、意欲的に論究が進められているという点では、まさに一巻の核心をなすものであって、本書の主眼を端的にさし示しているといえる。

本書は、すべて十一章から構成され、各章は二節ないし七節の範囲内に分節されており、その叙述は整然と進行している。

著者は、まず、「国語教育と話しことばの創造」(第一章)という、書名そのままの序章において、在来の話しことば教育の本質的欠陥を鋭く指摘すると同時に、国語教育と劇の学習について、両者の関連を求めつつ、「劇教材は言語

教育における話しことばの教材として最適なものである。」(同上書、七べ)とし、国語科教育における劇の学習の発展と展開に言及している。

さて、著者は、「話しことば教育の前提」(第二章)において、「いつも子ども話を聞いて理解してやるという態度こそ、話しことば教育の大切な前提条件なのである。」(同上書、一五べ)と道破し、「真実をどのように話すか。どのように自分の心を相手に正しく伝えるか。相手の話からその真実をどのようにに聞きとるか。相手の心や考えをどのように正しく理解するか。そのような努力が『聞く・話す』の学習であり、話しことばの教育なのである。」(同上書、一七〜一八べ)とする。西尾邦夫氏は、話しことば教育のありかたを、言語機能の本質に即して探究しつつ、話しことば教育の根本理念を、「それは話しことばを通して、子どもの考え方やものの見方を正しく指導し、円満な社会人としての人間形成につとめるといふことにある。話しことばの教育は、なにもう

ましくしゃべるといふ技術的教育ではない。話しことばの発達とともに、その人間的成長を図るといふ広い教育の営みのなかでなされるべきである。」(同上書、二三ペ)ととらえられる。「暖い心と心の通った話しことばこそ、人間社会の相互信頼のかけ橋である。」(同上書、二四ペ)とするところに、西尾邦夫氏の善意とヒューマニズムの結晶をみる。

さらに、著者は、「話しことば教育の場」(第三章)を問題としてとりあげ、「話しことば教育の内的場と外的場とを密接に関連づけることがどうしても必要なのである。話しことば教育を巨視的に考え、広く社会教育、国民教育として考へるべき必要が痛感されてならない」(同上書、三一ペ)と述べ、氏の考へるところを、「要するに、話しことば教育の内的場と外的場を関連づけ、方言の問題ばかりでなく、もっと広い意味での話しことば教育の限界を除去することにつとめ、積極的にその対策と方法を確立しなければならない。どうしても、望ましいことばの環境づくりが必要だということなのである。」(同上書、三三ペ)とまとめられる。氏は、とりわけ「教師の態度、心構えというものが話しことばの指導の根本的要素をなしている」(同上書、三九ペ)と考へる。

かくて、著者は、「話しことば教育と劇の学習」(第四章)の問題に及び、両者の関連とくに、劇文学ならびに劇的活動の本質に触れ、つづいて、「話しことばとしての劇の言語」(第五章)に言及し、「対話」であるとともに「魂の流露」である劇の特質を説きつつ、「魂の結晶体」としての「劇的言語」の問題を説く。そこからさらに、「話しことばの創造」(第六章)の問題に進んで、「何も新しいことばを創るといふことではなく、自分の心の働きを最も的確に表現することばを話すという意味においての話しことばの創造ということ」(同上書、八〇ペ)を説き、「むだ口からむだ口でない話しことばへの発展——それは正しいことばの創造への働きである。」(同上書、八一ペ)とする。平凡なことばによる非凡な着眼がそこにみられる。かくして、著者は、「劇による

話しことばの創造」へと言及し、「ことばの動作化」・「劇遊び」の問題を明快に説く。「劇遊び」の指導について、著者は、「指導者は、熱しやすい監督者でも、冷たい訓戒者でもない。辛抱強い陽気な援助者であるように心がけることが大切である。」(同上書、九六ペ)とする。含蓄にとむ立言である。

さて、この「話しことばの創造」(第六章)は、以上見てきた、第一章から第五章までを受けると同時に、以下の第七章から第十一章へと展開していく起点ともなっている。

## 二

それ以下の五章、「劇を創る子どもたち」(第七章)・「劇教材の展開」(第八章)・「欧米諸国における劇の学習」(第九章)・「古典の劇教材」(第十章)・「劇の学習をどのように確立させるか」(第十一章)は、本書の各論であるとともに、中核部を構成していて、演劇学者・話しことば教育研究者としての著者の面目が遺憾なく発揮されている。

西尾邦夫氏は、「グループのなかで自己を生かし、創造の喜びを味わうことができるような活動として最もふさわしいものは劇であろう。」(同上書、一〇一ペ)とし、また、「劇は子どもたちの心の絵であり、心の世界である。」(同上書、一一三ペ)とする。さらにまた、氏は、「劇は人間の最も根源的な生命(エネルギー)について追求するものであるから、その言語の機能も最も深い人間の本質的な生き方にかかわるものとなってくる。したがって劇のことは人間の生きる力の形象であるといえよう。」(同上書、一一五―一二六ペ)とし、「劇的言語の最も原初的、本質的な機能は行動そのものであり、このことだけは絶対に不動である。劇を創り出すことばは、いわゆる『せりふ』言語がすべてではないということ、劇的表現のすべてが劇の根源的言語であるということ、われわれは忘れてはならない」(同上書、一二〇ペ)とする。あるいはまた、「いわゆるアリストテレスの『カタルシス(浄化)』は、現実と虚構との間のわず

かな境に成立するのである。」(同上書、一二三べ)とも、鋭く指摘する。——このように、西尾邦夫氏の劇的言語の表現の本質への迫りかたは、めざましくかつ自信にみちて明快であり、示唆にとむ。

「劇教材の展開」(第八章)においても、論述は具体的になされ、展開における重点はまことに的確におさえられている。たとえば、「表現読みにおいていつも『間』\*のことが問題になるようであるが、それは人物の行動を頭のなかで追いながら読んでいけば、子ども自身が自然に実感として気がついてくるはずである。」(同上書、一四八べ)とし、「子どもたちの想像力や創造力を大いに伸ばして子どもたちの活動をほんとうに生きいきと展開させていく方法こそ、われわれに必要な指導技術なのである。しかもその方法論はいつも新鮮なものでなければならぬ。」(同上書、一五五べ)と道破する。低学年・中学年・高学年・中学生・高校生という、各発達段階に即した、劇の指導上の要点もみごとにとおさえられている。

著者の劇の学習への視野は広く、「欧米諸国における劇の学習」(第九章)を展望して、とりわけ、イギリス・アメリカのばあいを具体的にくわしく紹介している。アメリカのクリエイティブ・ドラマティックスについては、とくに示唆深い紹介がなされている。西尾邦夫氏には、すでに「クリエイティブ・ドラマティックス入門——創造への教育——」(昭和41年5月1日、福村出版刊)という好著があり、創造への教育の新鮮な指針をもつとめている。

著者は、「古典の劇教材」(第十章)に言及したのち、「劇の学習をどのような確立させるか」(第十一章)において、言語教育と演劇教育の関連と問題の所在を説き、芸術教育としての劇の学習について、とくにその確立について、周到で熱意にあふれた考究を進めている。すなわち、著者は、「本来独立した教科としてあるべき演劇が国語教育のなかに間借りしているということからくる本質的な矛盾」(同上書、二六〇べ)を衝きつつ、未来に向かって、現状を

どう打開し、どのように志向すべきかを説述しているのである。

### 三

著者西尾邦夫氏は、つとに早稲田大学・同大学院において、劇文学を専攻された演劇学者であり、注目すべき業績を着々と挙げている方である。「児童演劇脚本作法」(C・B・コーピング著)の訳述・紹介(「演劇教育研究所資料」7)を初め、演劇に関する研究はすでに何冊もまとめられて世に問われている。そうした業績の集積の上に、このたび新著「国語教育と話しことばの創造——劇の学習——」がまとめられたのである。演劇が芸術教科として学校教育のなかに確立されることを希求する著者が、冷静にしかも熱意をこめて、国語教育における「劇の学習」を正面から論究していく態度は、堂々としてりっぱである。論を空転させることなく、話しことば教育と劇学習との本質と両者の関連を、原理的にも実際のにも精細に考究していて、現場実践者に多くの新鮮な示唆を送り、多大の啓発を与えてやまないものがある。

話しことば教育史の上からも、また学校における劇学習の歴史の上からも、現時点において、もっとも意欲的な新しい収獲として、本書の成果を評価することができる。ただし、演劇教育史、話しことば教育史の地平に、本書のきざむ足跡は鮮明で、かつ意義深いものがある。(広島大学教授)

(B6版・二六五頁・定価七八〇円・成文堂刊・全国学校図書館協議会選定図書)

#### 西尾邦夫氏博報賞受賞

西尾氏は今回掲、演劇の理論的研究に基づく「国語教育と話しことばの創造——劇の学習——」ほか多くの著書・論文によって、新しい指導体系を樹立して、国語教育の発展に寄与した功績で、昭和四十五年十一月三日、第一回博報賞(国語教育部門)を授けられた。(人文学会編集委員会)